

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果

越前町教育委員会

1 調査概要

(1) 調査日時

平成28年4月19日(火)

(2) 調査目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(3) 調査対象

小学校6年生(172名)

中学校3年生(195名)

(4) 調査内容、注意点

*問題や質問は、文部科学省(国立教育政策研究所)Hpから見るすることができます。

①教科に関する調査(国語、算数・数学)

| 主として「知識」に関する問題(A) | 主として「活用」に関する問題(B) |
|--|---|
| ○身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ○実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 など | ○知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ○様々な問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 など |

②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

| 児童生徒に対する調査 | 学校に対する調査 |
|-----------------------------|------------------------------------|
| 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する調査 | 指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 |

③注意点

本調査によって測定できるのは、子どもたちの学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面です。序列化や過度な競争が生じないようにするため、教育上の効果や影響などに配慮して公表いたします。

2 調査結果

(1) 教科の調査結果

①平均正答率の比較

〈表の見方〉 ◎……3.1ポイント以上 上回る

○……±3ポイント以内

| | 小学校 | | | | 中学校 | | | |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | 国語A | 国語B | 算数A | 算数B | 国語A | 国語B | 数学A | 数学B |
| 福井県との比較 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 全国との比較 | ○ | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |

3.1ポイント以上下回る教科はありませんでした。



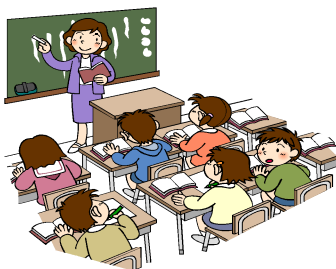
成果がみられた点

資料から必要な情報を読み取ること

目的に応じて、複数の文章や、文章と図表などの資料とを関係付けて読む力が伸びています。これは経年課題でしたが、文章だけでなく、新聞やグラフ、写真など、多様な資料から情報を読み取る指導を続けてきた成果が表れてきたといえそうです。

書写の力

用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決める書写の問題がよくできていました。平成21年にも類似問題が出題され課題となっていました。改善しています。



課題のある点

読み取ったことをもとに自分の考えを書くこと

目的や意図に応じて、グラフや表をもとに分かったことや自分の考えを的確に書くことに、依然として課題があります。

ローマ字を読むこと・書くこと

平仮名で書かれた「りんご」「あさって」をローマ字で書く問題、ローマ字で書かれた「hyaku」（ひゃく）を読む問題が出されましたが、半数程度の児童が間違えたり、答えを書けなかったりしました。平成21年に出題（「たべもの」の書き、「happa」の読み）されたときも課題で、3年後に再び中学校で出題された時には改善されていました。現在の小学生には、まだ定着していないようです。

今後の指導について

- ☆ 説得力のある文章を書くには、文章や資料から必要な情報を読み取るだけでなく、目的や意図に合うものを選んだり、自分の考えが伝わるように工夫したりして書く力をつけなければなりません。誰に対して何を伝えるために書くのかをはっきりさせながら、自分の考えの根拠となる資料を選び、文章の内容や構成を考えて書く指導を充実させます。
- ☆ ローマ字表記は、日本語の母音と子音の組み合わせであることを意識させ、規則性に気づかせながら、清音だけでなく濁音・促音・拗音の読み書きの指導を行います。また、国語科で学習した後も、コンピュータを使った学習等と関連付けながら、生活の中でローマ字を読んだり書いたりする機会を増やします。



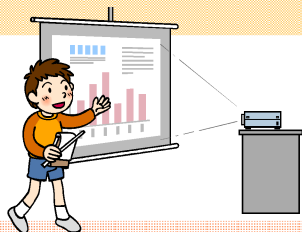
成果がみられた点

計算の確かめ

昨年度、足し算の結果を引き算を用いて確かめる方法が出題され、課題となりました。今回は、割り算の結果をかけ算を用いて確かめる方法が出題されましたが、たいへんよくできていました。答えの確かめまでが計算であることを理解し、検算を習慣化する指導が行われた成果です。

三角形の底辺と高さの関係

面積を求めるときに必要な三角形の底辺と高さの関係について、よく理解できていました。平成24年にも類似問題が出題され課題がありましたが、改善しています。



課題のある点

割合の理解

割合の意味の理解は、これまでも継続して課題となってきました。今回も、全体の大きさに対する部分の大きさを表す割合の意味を問う問題や、1を超える割合を百分率で表す問題に課題がありました。

式の意味を理解して説明すること

式の意味や式の中の数値の意味を理解し、数や言葉で説明することに課題があります。

図形についての理解

図形の特徴に着目して、筋道立てて考えることに課題があります。

今後の指導について

- ☆ 割合は基準量と比較量の二つの量の関係を示していることを、十分に理解できるようにすることが必要です。式や言葉、図などを使って説明する活動や、低学年のうちからテープ図や線分図、関係図などを用いて考え、数量の関係を理解する活動を重視しながら、指導の工夫を図ります。
- ☆ 日常生活の出来事を算数の学習で取り上げ、式に表したり、式の意味を具体的な場面と対応させ図に表したりしながら、問題を解決する学習を充実させます。
- ☆ 図形の学習では、観察や具体的な操作活動を通して、図形の性質を見つけたり確かめたりできるようにしていきます。そして、図形の特徴や身に付けた知識をもとに筋道立てて考え、考えたことを説明し合う学習を充実させます。



成果がみられた点

表現の工夫とその効果について、自分の考えを書くこと

ちらしに見られる表現の工夫とその効果について、具体的に自分の考えを書くことができていました。読み取ったことをもとに根拠を明確にして自分の考えを書くことは、経年課題でした。これまでに、様々な資料から必要な情報を読み取り、それをもとに自分の考えを伝える活動を重視してきた成果が表れてきました。

相手や場に応じた言葉遣いに気をつけて話すこと

職場体験の訪問先に電話をすることが想定された場面や、敬語を使うことが必要な場合に、相手や場に応じた言葉遣いに気をつけることが、よくできていました。昨年度も同様の問題が出題されましたが、向上しています。

古典の知識

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことがよくできていました。これは、昨年度に続いて良好です。また、今年度初めて出題された文語表現（「忘れがたき」）の意味を問う問題もよくできており、古典についての基本的な知識が身に付いているようです。

課題のある点

目的に応じて必要な情報を読み取ること

物語を読む際に、現代とは異なる社会状況について図鑑を使って知ろうとする場面で、必要な情報を読み取ることに課題がありました。

課題に応じた情報の収集方法を考えること

課題を決め、それを解決するために、学校図書館で必要な本の探し方を考える問題で、ほとんどの生徒が課題は決められましたが、探し方を書くことに課題がありました。平成25年にも、学校図書館、インターネット、その他から選んで調べ方を考える同様の出題がありました。その時より、正答率がやや下回っています。

文脈に即して正しく漢字を書くこと、辞書を活用して漢字の意味をとらえること

漢字の読み書きは全体的に良好であるにも関わらず、「今までにないドクソウ（独創）的な考えだ」だけが書けなかった生徒、漢和辞典の意味の中から、「賛美」の「美」の意味として適切なものを選ぶことができなかった生徒が多くいました。



今後の指導について

- ☆ 文章を読む際に、未知の事柄や意味の分からない語に出会ったら、資料や辞書を活用して必要な情報を得ることが大切です。その際、どのような情報が読み取れたのか、その情報は自分の疑問の解決にどう活かせたのか、主体的に考えられるよう指導します。
- ☆ 課題を解決するためには、目的に応じて適切な情報を収集する必要があります。新聞や雑誌、コンピュータや情報通信ネットワーク、図書館など、様々な情報源の特性をもとに、目的に照らして必要な情報を得て、解決していけるよう指導します。
- ☆ 漢字は単に読み書きできるだけでなく、文脈の中で適切に使えるようにすることが大切です。漢字の意味に着目し、熟語の意味と結びつけながら適切にとらえたり、辞書で確かめたりすることが習慣化できるよう指導していきます。



成果がみられた点

平面図形の基本的な性質

図形の基本的な性質がよく理解できています。特に、3年前の小学校6年生時の調査で課題だった三角形の合同条件についての理解は、よくできていました。

文字式の変形

具体的な場面（底辺の長さ a cm、高さ h cm の平行四辺形の面積 S cm²）で、等式の性質を用いて式を変形させることがよくできていました。同様の出題があった平成21年より、大きく向上しました。

一次関数の表・式・グラフ・変域

一次関数のグラフの特徴が表と関連付けてよく理解できており、式から変化の割合を求めたりグラフを用いて変域を求めたりすることもできていました。



今後の指導について

- ☆ 硬貨を投げて表裏が出る場合など、同様に確からしいときに起こりうる場合の数を確かめながら確率を求めたりと、実感を伴って用語の意味が理解できるよう指導します。また、学習した後も、折に触れて用語の意味を確認し、使えるようにしていきます。
- ☆ 具体的な手順を数学的に考える場面を設定しながら、問題を解決した過程を振り返り、解決方法を説明し合ったり、お互いの説明を比較検討したりする活動を大切にします。
- ☆ 生活における事象が、グラフなどで数学的に表されているとき、グラフのもつ意味を具体的な事象に即してとらえ直し、確認する活動を十分に行います。

課題のある点

数学用語の意味の理解

自然数、方程式の解、増加量、近似値、確率といった数学用語の意味の理解に課題があります。一元一次方程式を解くことができているにも関わらず、解の意味を問われると、解の値と両辺の式の値を混同してしまったり、確立は求められるのに「同様に確からしい」ことの意味の理解が不十分だったりしています。

筋道立てて説明すること

論理的に説明することや、処理の手順を数学的に説明することに課題があります。

$x=4$ 、 $y=9$ となるような関数において、不足している条件が比例か反比例かは判断できても、理由の説明が十分ではありませんでした。数当てゲームをする問題場面では、文字を使って手順通りに求めた数から、最初に決めた数を当てる方法の説明が不十分だったり、答えが書けない生徒がいたりしました。

グラフの数学的な解釈

車を購入して x 年間使用するときの総費用 y 万円の関係を一次関数のグラフに表したとき、傾きが何を表しているかの読み取りが不十分でした。グラフを事象に即して解釈することが課題です。

(2) 質問紙の状況 (小・中学校)

①児童生徒質問紙から

良好な点、改善の状況にある点

生活習慣、意欲的な生活

昨年度から引き続き、生活・学習習慣（朝食・起床時間・家庭での宿題）について十分に身につけています。学校生活においても「学校へ行くのが楽しい」「学校で友だちの会うのが楽しい」と感じている児童・生徒が9割以上で、充実した生活を送っています。

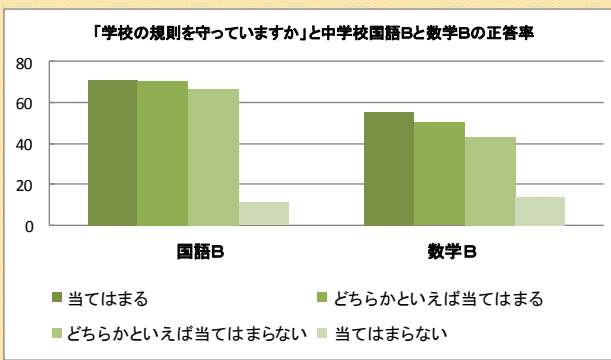
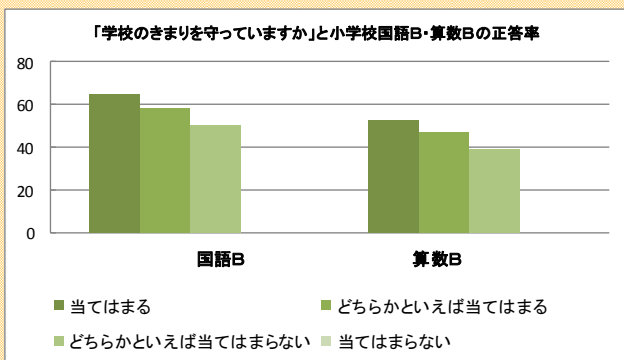
各学校で、Q-U調査（楽しい学校生活を送るためのアンケート）等を通して、きめ細かに児童生徒の様子を把握し、安心できる学校・学級づくりに取り組んでいる成果がうかがえます。

ものごとをやりとげること、協力すること

充実した学校生活の中で、特に「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある」「学級のみんで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」など、達成感や協力することの大切さを感じています。

きまりを守ること

町内のほとんどの児童・生徒が学校のきまり（規則）を守り、規律ある学校生活を送っています。また、規律ある学校生活を送っている子ほど、教科の正答率が高い傾向にあります。



課題となる点

家庭での学習時間

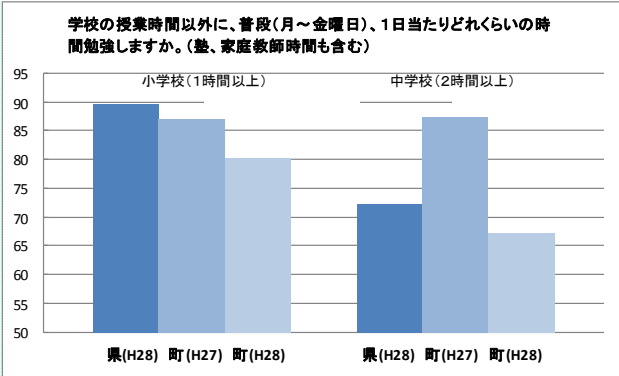
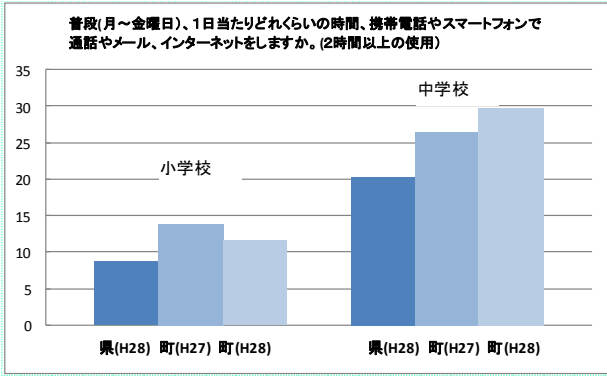
平日（月～金曜日）の家庭学習時間が、昨年度と比較して減少しています。県平均と比較しても学習時間が短い状況となっています。メディア利用の時間が増えたことも影響しているかもしれません。

メディアの利用

ゲームをしている時間やテレビ視聴の時間は、小学校・中学校ともに減少傾向にあります。

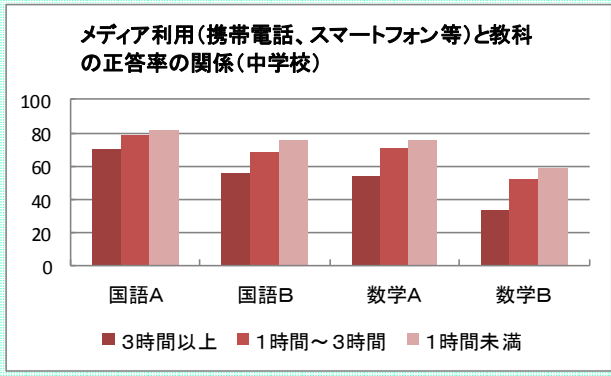
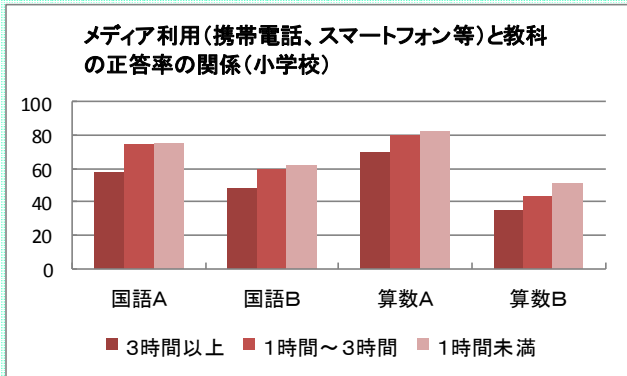
しかし、携帯電話やスマートフォンによるメディア利用については、増加傾向にあります。特に、昨年減少した中学生が、今年度増加に転じました。

各学校では、「小中学校が統一した期間を設定し、過度なメディア使用を控える」ことや「児童・生徒やPTAと連携してスマートルールを作成する」ことに取り組んでいますが、改善は容易ではなさそうです。すでに作成したルールを改めて見直し、児童・生徒がより意識できるものに変えていくとする動きもあります。



メディアの利用時間と学力との関係

携帯電話やスマートフォン等のメディア利用時間と、教科の正答率との関係は以下の通りです。メディア利用の時間が長くなるほど、教科の正答率が低くなる傾向にあります。特に、活用力が求められる国語B、算数・数学Bの問題ではその特徴が顕著に現れています。



地域の一員としての意識

「今住んでいる地域の行事に参加している」「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」にも関わらず、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」と回答する児童生徒の割合が低くなっています。次代の郷土や社会をつくる人材である子どもたちに、周りの人たちとよい関係を築きながら、社会と向き合い関わろうとする意識を育てていく必要があります。

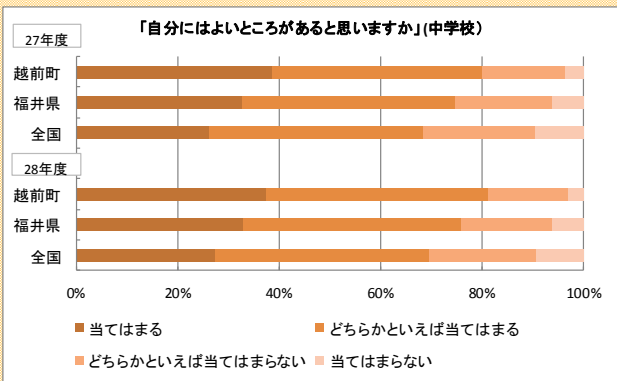
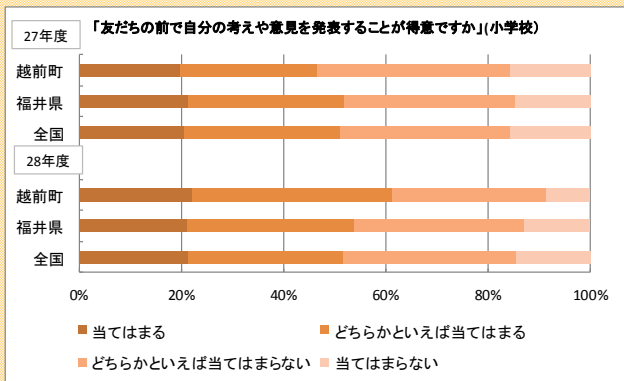
(2) 質問紙の状況 (小・中学校)

② 学校質問紙から

良好な点、改善の状況にある点

よさや可能性の評価

全ての学校が、「児童・生徒のよい点や可能性を見つけ、積極的に評価する」ことに、継続して取り組んでいると回答しています。これは、「友だちの前で自分の考えや意見を発表することが得意」「自分にはよいところがある」と言える児童生徒が昨年より増加し、自分に自信を持って行動することができている状況と関連があると思われます。



全国学力・学習状況調査の活用

各学校では、3年前から、全国学力・学習状況調査の結果を分析し、分析結果やその改善策について公表しています。特に、小学校では「結果を分析し、学校全体で成果や課題を共有した」(平成27年度は62.5%)「学校全体で教育活動を改善するために活用した」(平成27年度は75%)と回答している学校が100%です。中学校では、調査が行われた教科だけでなく各教科が連携して言語活動の充実に取り組んでいます。どの学校でも、調査結果を活用し、学校全体で授業改善に取り組んでいます。

保護者や地域の方の協力

特に小学校で、「PTAや地域の方が学校の諸活動(学校の美化など)にボランティアとしてよく参加してくれる」「保護者や地域の方が学校における教育活動や様々な活動によく参加してくれる」と回答している学校が多く、学校の教育活動や環境整備等にご協力をいただいていることがわかります。そして、全ての学校が、「保護者や地域の方の学校支援ボランティア活動は、学校の教育水準の向上に効果がある」と考えています。

課題となる点

授業の目標と振り返り

授業の中で目標(めあて・ねらい)をはっきり示すことができているようですが、授業の最後に学習内容を振り返る活動は、十分行えていません。児童生徒も振り返りが不十分だと考えています。授業で何を学び、何ができるようになったのかを、児童生徒自身が自覚できるような授業をめざします。

ICTを活用した授業

学校におけるパソコンやタブレット端末等の情報通信技術を活用した授業の実施については、不十分です。今後、各学校では、導入された遠隔授業・研修システムやタブレット端末等を活用して、子どもたちが他者と協働するためのコミュニケーション能力の育成や学力向上につながるよう取り組んでいきます。

地域社会とつながるカリキュラムづくり

「指導計画の作成に当たって、教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせている」と回答した学校は、まだ少ない状況です。これまで地域の協力を得ながら行ってきた学習や活動を、地域社会と連携・協働するという視点で計画し、進めていく必要があります。

3 子どもたちの成長のために

(1) 越前町の取組

越前町では、「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな子どもの育成」を学校教育目標に、「育ちを支える」「学びをつなぐ」をキーワードに、学校教育の質の向上に取り組んでいます。

これまで、子どもたちの学力向上や安心して学べる学校作りのために、次のような事業を行ってきました。

- 複式学級に対する補助教員の配置
 - 小学1～6年生の全児童に、学力検査を実施
 - 小学校の外国語活動に対してALTや地域人材を派遣
 - 教員の資質向上のための自主的な研修会への補助
 - 小中学校全クラスでQ-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）の実施
 - 全小中学校にスクールカウンセラーを配置
 - 支援が必要な児童生徒に対して学習支援員・生活支援員等を配置
 - 小中学校の校内LAN整備、教育用PCの入れ替え
- など

今回の調査で明らかになった成果と課題をもとに、今後もこれらの施策の充実と改善、学校への支援に取り組みます。

また、現在越前町では、学力調査を活用した「授業力アッププロジェクト」を推進しています。これは、子どもたちが、これからの社会を生きていくために必要な力を身に付けられるよう、授業を改善していこうという町ぐるみの研究で、町教育委員会と福井県教育研究所が支援しています。このプロジェクトが、いっそう充実するよう取り組みます。

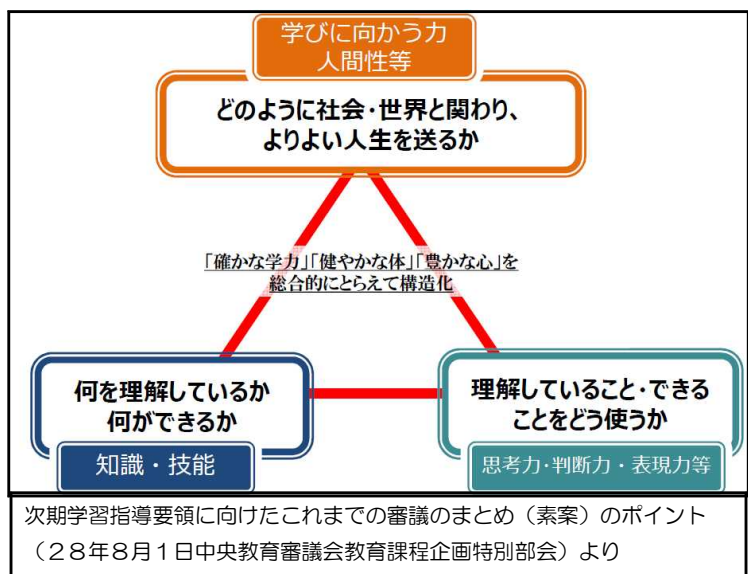
(2) 保護者・地域の皆様へ

日頃より、子どもたちや学校への多大なご支援をいただきありがとうございます。

全国学力・学習状況調査の問題や質問には、これからの社会を生きていく子どもたちに必要な資質や能力はどのようなものか、これからの学校教育が実現すべき課題は何か、というメッセージがこめられています。

学校教育の指針となる学習指導要領改訂の方向性として示された、子どもたちに必要となる資質や能力には、右の3つの柱があります。

「急激な社会の変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を備えた子どもたちに育てる」という目標を、家庭・地域・学校が共有し、協力して生活や学習の質を高めていくことが必要です。



今回の調査結果を受け、特にご理解とご協力をいただきたいことは以下の通りです。

① 保護者の皆様へ

調査結果のお知らせ

各学校では、一人一人の子どもたちや学校の結果と状況を分析し、具体的な指導の改善に取り組みます。

調査対象学年のお子さんには、学校から個人票が配布されます。お子さんの教科の調査結果をご確認ください。学校全体の結果や状況については、学校便りや各学校のホームページ上でお知らせします。

課題をもとに

質問紙の状況から、メディアの利用や家庭学習に課題があることが分かりました。

学校でも指導しますが、ご家庭の協力なしには解決できない課題です。限られた時間をどのように使うか、子どもたちが自分で考え、判断し、行動できるようになるために、ぜひご家庭での話し合いやご指導、見守りをお願いいたします。

② 地域の皆様へ

課題をもとに

「次世代の学校・地域」創生プラン（文部科学省28年1月25日）には、「一億総活躍社会の実現と地方創生の推進には、学校と地域が相互にかかわり合い、学校を核として地域社会が活性化していくことが不可欠」とあります。

質問紙の状況から、学校は地域のご協力をいただき、その効果を実感していることが分かりました。しかし、学校が地域にお願いをして応えていただいている現状を改善し、地域の方には学校のパートナーとして、子どもたちの教育に関わっていただくことが必要です。

越前町では、今年度、地域と学校の連携・協働に向けた「福井型コミュニティースクール」を推進するため、町内各小中学校に「地域コーディネーター」を配置しました。この方々に地域と学校をつなぐ役割をお願いし、子どもたちが用意された環境で活動するのではなく、地域の方とともに、自分の住んでいる地域がよりよくなるよう考え、ともに行動できるようにしていきます。

地域での学習や体験活動、子ども会活動、スポーツ少年団活動、ボランティア活動など、子どもたちが地域の方と活動する機会には、「子どもたちが自立して活躍できる社会をめざす」という視点でかかわり、見守ってください。